

## 幼児のごっこ遊びにおける「役割」についての検討

幼児が「何者かになっている」ということの位置づけに注目して

利根川 彰博

Examination of "role" in make-believe play of children

Pay attention to the position that the child is "someone"

Akihiro Tonegawa

キーワード：ごっこ遊び、何者かになる、役割、幼児

Key Words : Make-believe play, Become someone, Role, Child

要約：「ごっこ遊び」において、幼児が「自分以外の何者かになる」という姿はよくみられる。一般的には、その姿を「役割」と捉えられている。しかし、実際の幼児の姿は多様であり「役割」という概念で捉えることができるだろうかという疑問がある。そこで本研究では、先行研究を検討することによって、「ごっこ遊び」において、子どもが「自分以外の何者かになる」姿がどのように整理され、位置づけられてきたかを明らかにすることを目的とした。結果、「登場人物としての役割」として捉えられていることがほとんどであったが、「機能的な役割」という側面を指摘する研究を確認することができた。

Abstract : In " Make-believe play ", the appearance that the infant becomes "Someone other than me" is often seen. In general, the figure is regarded as a role. However, there is a doubt that the actual appearance of infants is diverse and can be grasped by the concept of "role". Therefore, the purpose of this study was to clarify how children have been arranged and positioned as "someone other than themselves" in " Make-believe play" by examining previous research. As a result, we were able to confirm research that pointed out the aspect of "functional role", although it was most considered as "role as a character".

## 1. はじめに

子どもの自発的な遊びを大切にしようとする幼稚園において、子どもたちを観察していると、「見立て」や「ふり」など、想像力を働かせて遊ぶ姿をひんぱんに目にする。一般的に「ごっこ遊びをしている」と呼ばれている姿である。しかし、その子どもたちが、いったいどんな魅力を感じながら遊んでいるのか、どんな意味世界を創り上げているのか、私たちがそれをはっきりと捉えようとする、それはとてもは難しいことに気づかされる。

なぜ難しいのかという理由は、第一にひとりひとりの子どもが描くイメージが目に見えないものであるから、といえる。そして第二に、3歳児～4歳児～5歳児と、子どもが成長するにつれて、その様相が変化していくから、ということも挙げられよう。

このような「ごっこ遊び」の内実を捉えるには、想像力やファンタジーが関与する創造的な遊びとしての側面から、象徴機能の発揮の仕方やストーリー展開のプランの在り方などを検討することが必要かもしれない。あるいは、ごっこ遊びにおける「役割」が、現実子どもたちが見たり聞いたり経験したりした人間関係や行為状況から、どのように作り出されていくのかという側面から検討する必要もあるだろう。もちろん、これまでも「ごっこ遊び」を捉えようとする様々な研究がなされてきているが、研究を進めるための概念整理が丁寧に行われてきているわけではない。

そこで、本論ではごっこ遊びの内実に迫る前段階の地ならしとして、「役割」という概念について、先行研究を参照しながら整理していきたい。「ごっこ遊びの意義」などについての検討は別の機会に譲り、「ごっこ遊び」の中でも、『子どもが自分以外の何者かになる』姿をどのように捉えるか」という点に絞って考えていくことにする。なぜなら、この問題は、ごっこ遊びのなかでも重要な現象であるにもかかわらず、それを捉える概念は、多くの場合「役」あるいは「役割」とされており、明確に整理されていない状態にあるからである。

子どもたちは「お母さん」になったり、「ライオン」になったり、ヒーローやお店屋さん、いろいろなものに「なって」遊んでいる。この「○○になっている」姿はこれまでどう捉えられてきたのか、ということ「役割」概念という視点から整理していくことが本研究の目的である。

## 2. 子どもが「自分以外の何者か」になること

河邊（2020）は「ごっこ遊び」の大枠を次のように説明している。

C. ガーヴェイは、ごっこの構成要素として〈役割〉〈物〉〈動きのプラン〉〈状況〉の4つを挙げています。〈役割〉をとることで役に応じた〈物〉の扱いが生まれ、そのことから〈動きのプラン〉が引き出されます。そこに生まれる世界がごっこ遊びの〈状況〉というわけです。

砂場の子どもは石〈物〉をイチゴに見立てて、自分はお店の人かお母さんになったつもり〈役割〉で「イチゴです」と母親に渡しました〈動きのプラン〉。母親がそれを食べるふりをしてくれたら、食べ物をやり取りするという〈状況〉が生まれたでしょう。（『遊びが育つ保育～ごっこ遊びを通して考える』フレーベル館、p67）

河邊は、ガーヴェイの研究を下敷きに、子どもが「○○になること」を、「役割をとること」と説明している。このように、ごっこ遊びで子どもが「お母さん」や「お姉ちゃん」、「お医者さん」や「パン屋さん」などになっている姿を指して、「役割」という言葉で説明することが、ごっこ遊びに関する言説では一般的である<sup>注1)</sup>。

しかし、河邊の説明をもう一度、映像を思い浮かべながら見てみたい。砂場の母子の様子が描かれている。母親の年齢は不祥であるが、それは大きな問題ではない。問題は子どもである。砂場で「イチゴです」とお母さんに石を渡す子どもの姿が描かれているが、この子どもは何歳くらいであろうか。仮に2歳くらいとすると、はたして本当に「お店の人かお母さんになったつもり」でいたのだろうか。河邊はあくまで、〈物〉〈役割〉〈動きのプラン〉〈状況〉という概念の関係を示すことが目的でこの例を挙げているのであろう。であるが、子どもが「自分は○○になっている」と自覚して「自分以外の何者かになる」ことは、案外簡単ではない。2～3歳くらいと考えた時には、「ふと目の前にあった石がイチゴに見えちゃった」ことから導かれた行動で、自分が誰になっているかというイメージは持っていないということも十分考え得る。おそらくそう解釈する方が妥当であろう。幼稚園で3歳児クラスを担当している保育者たちから、「子どもたちが入園してからしばらくの間、子どもたちは、ままごとコーナーに用意されたモノを使って、それを操作することや、見立て遊びを楽しんでいます、〈自分のまま〉で遊んでいる」と聞いたことがある。

モノに関わって遊んでいるとき、例えばコンロの上に鍋を置いて、その中に食材に見立てたモノを入れてかき混ぜていると、ふとお母さんが料理をしている姿が思い浮かび、自分の動きとお母さんの姿とが重なるといった瞬間もあるだろう。しかし、こうした「誰なのかがはっきりしない」状態で遊んでいる様子まで「役割をとっている」と説明することには違和感がある。

つまり、子どもたちが「見立て」などの想像力を使って遊んでいるとして、常に「何者か」になっているわけでもなく、そうした状態も「役割」という言葉で理解しようとするには無理があるのではないかと思われるのである。

では、「ごっこ遊び」に限定せず、私たちが日常生活で使っている「役割」という言葉の意味をあらためて考えてみたい。「役割」という言葉の辞書的な意味は、「役目をそれぞれの人に割り当てること。また、割り当てられた役目」とされている。このことを次のエピソードから検討する。

4 歳児クラスで、いつもままごとコーナーで遊んでいる女の子たちがいる。登園して支度を済ませたAちゃんとBちゃんが、ままごとコーナーの中に入ると、打ち合わせを始めた。

A「私、お母さんね」といい、キッチン・スペースに行く。

B「うん。私、お姉ちゃん。学校、行ってるのね」と、ランドセルを手にする。そこにCちゃんがやってきた。

C「入れて」

A・B「いいよ」

A「何になる？ 私、お母さん。Bちゃんはお姉ちゃん」

C「じゃあ、私もお姉ちゃん。中学生ってことね」

このように、子どもたちは「自分が誰であるのか」ということを互いに確認し合っていることが分かる。こうした遊びの姿では、ままごとコーナーという〈場〉が「おうち」という意味を持ち、それぞれがその「家族」であることが暗黙のうちに合意されている。つまり、先にみた「役割」の辞書的な意味、「役目をそれぞれの人に割り当てること。また、割り当てられた役目」に照らしてみると、この4歳児の子どもたちの姿は、「役割をとっている」という捉え方がぴったりと当てはまるようである。

そして、もう一つ気づくことがある。役割とは、「役目をそれぞれの人に割り当てること」とすると、何か全体（この場合は「家族」）があって、その中の役目を、それぞれの人に割り当てるということである。つまりごっこ遊びにおいて、それぞれの子どもが「役割をとる」ということは、同時にその「全体」を捉えている、ということもセットであるということなのである。

先の「砂場の母子」のエピソードに戻ると、子どもが「お店屋さん」の役割をとるなら、母が「お客さん」となってこそ「全体」が成り立つわけである。子どもが「お母さん」なら、母が「子ども」であって「全体」が成り立つ。しかし、このエピソードの登場人物である子どもは、その「全体」を捉えているわけではないと推察できる。

「だから、この遊びは未熟である」とか、「成立していない」とか、そうしたことを述べたいわけではない。こうした遊びがあることは事実であり、それをできるだけ事実にして捉えたいのである。すると、その事実を「役割をとっている」姿であると捉えることに、違和感が生じてしまう。こうした違和感は、幼い子どもの姿だから感じられるというわけではない。次のような姿もある。

3 歳児のYくんが保育者に手伝ってもらいながら、おめんと翼をつくって、それを身につけた。翼のある恐竜「ランフォリンクス」になっているとのことであった。Yくん

は、翼に見立てた両腕を広げて園内をグルグルと歩き回る。気分は空を飛んでいるのだろう。

別の3歳児、Mくんは「ライオン」になって、四つ足で歩いている。誰かがちょっかいを出すと、「ガオーッ」と吠え声をあげて襲い掛かる。

このように、恐竜や動物という「何者かになって」遊ぶ姿を見かけることも少なくない。こうした姿を目にしたときにも、「役割をとっている」という見方は違和感がある。そもそも、恐竜や動物が「役割」だとすると、どんな「全体」に対しての役割なのだろうか。

あらためて「役割」の意味を確認すると、それは「何か全体があって、その中の役目を、それぞれの人に割り当てるとのこと」という意味であると捉えて議論を進めてきた。しかし、実は「役割」の辞書的な意味はもうひとつ示されている。

例えば、麻生武は『「学び」の認知科学辞典』において、次のように説明している。

役割りというのは、社会において人が担っている公認された社会的機能をもつポジションのことである。たとえば、電車の運転手、警察官、保育園の教師、花屋、家庭の主婦、ホワイトカラーなどである。（p138）

つまり、「役割」とは、人間社会を成り立たせている機能を持つものを指していると考えられる。すると、恐竜や動物は人間社会を成り立たせているポジションを持っておらず、そのため、子どもが恐竜や動物になっている姿を「役割をとっている」と解釈する見方はふさわしくないといえよう。

では、これまではなぜ「ごっこ遊び」をしている子ども、「自分以外の何者かになっている」子どもの姿を指して、「役割をとっている」と解釈されてきたのであろうか。この問いはひとまず保留して、他の研究を参照していくことにしたい。

### 3. 久保田浩の『遊びの誕生』と加用文男の「心理状態」論

日本における「ごっこ遊び」の精緻な観察と分析の先駆けは、1973年に発行された久保田浩による『あそびの誕生』であるといえる。またデジタルな記録機器もない当時、白梅幼稚園の園長であった久保田は、地道な観察や記録とその分析から、ごっこ遊びに関する知見を記している。

久保田は「子どもが何者かになる」姿を取り立てて論じることはしていないのであるが、「遊びと仲間（集団）」という視点から、一つの主題として取り上げて論じている。では、その『遊びの誕生』から、久保田が「子どもが何者かになる」という姿について言及している部分を取り上げて探っていきたい。

二、三人の子どもが、ままごとあそびをしている。この構成がうごかないと、あそびそのものも、いちじるしい変化をみせないのがふつうである。おかあさんが、ごちそうをつくり、ふたりの子どもがそれをたべる——といった内容がくりかえされる。多少のバリエーションはあっても、あそびのおおすじはかわらない。

そこに、またふたりほどの子どもがくわわった状況を予想してみよう。そのあたらしいふたりが、子どもの役割をもつことは、まず考えられないだろう。

この子どもたちは、あるいはお客さまとしてくわわるか、おとうさんの役割をひきうけるか、あかちゃんにならされるかである。

こうした役割の増加はしぜん、あそびそのものを多様化していく。(p82)

このエピソードに登場する子どもたちは、何歳なのかは示されていないが、「①お母さん、②子ども、③子ども」という3人の構成で遊んでおり、そこに2人が加わるとしたら、「子どもの役割をもつことは、まず考えられない」ことであり、「お客さまとしてくわわるか、おとうさんの役割をひきうけるか、あかちゃんにならされるか」であるとしている。つまり、このごっこ遊びに参加するメンバーは、誰もが「家族」という全体を捉えていて、誰が何者の「役割をとるのか」ということをお互いに理解しながら遊ぶだろうとみられている。こうした姿は、幼稚園においては一般に4歳児の半ば頃から見られる姿といえるだろう。

ここで、久保田が「役割」と呼んでいるのは、演劇における登場人物と同じ意味に捉えて差し支えなさそうである。これ以降、こうした「役割」のとらえ方を「登場人物としての役割」と呼ぶことにしたい。これは先にみた麻生のいう「社会において人が担っている公認された社会的機能をもつポジション」と同様のことを指しているといえよう。

「役割」に関する久保田の関心は、遊びの「全体と個々の役割」、あるいは「その組織化」ということであり、年齢がすすむにつれてどのように組織化がすすんでいくのかということにあると考えられる。

また、「子どもたちのあそびをただしくとらえるためには、その時期の子どもたちの思考、認識のしかたを把握しなければならない」として、「役割」に「なっている」状態にあるときの、子どもの心理状態について触れている。

3歳児のネコごっこの事例（すっぽりと箱にはまりこみ、ときどき鳴き声をあげ、そしてねむりこむ動作をする）から、この時期の子どもが「ネコになっている」状態というのは、「自分の家にいるネコになりきっている」のであり、「日頃経験していることをそのまま再現することがすべてなのである」と解釈している。また、「そのまま」というのは、客観的にみて、正確にネコの状態をうつしているというものではなく、「きわめて主観的なもの」(p117)であるという。

そして、4歳児になると、「なりきっている」状態から一歩進み、「らしく演じようと努

力する」姿が見られはじめると指摘している。「らしく」というのは、「ぼくは、ライオンではないが、ライオンを演じるのだ」(p123) という意識の芽ばえを意味するという。自分が直接体験した「ライオン」だけでなく、絵本やテレビなどいろいろなところから得た情報を分析・再構成していくところも、「らしく」演じることを支えている。ただ、それがハッキリとしてくるのは 5 歳児になってからであり、5 歳児では「〇〇になる」とき、そこで“表現”されている〇〇は“〇〇らしさ”の条件がひきだされ、彼らなりに組みなおされたものであるということである。

### 加用文男の「心理状態」論

加用文男は「ごっこ遊び」(1983) という論考で、久保田の議論を引き継ぎ、子どもが「〇〇になる」姿について考察している。個人の心理的な状態に関心を向け、さまざまな具体例を取り上げつつ論じているが、「役割」については同じように「登場人物としての役割」として扱っている。ここでの加用の力点は「〇〇になっている」個人の心理的な状態であり、その点を整理している。

一般に「なりきっている」といわれる状態にある時、まったく〇〇になりきっているわけではなく、加用は「自分と〇〇とが未分化に融合した状態にある」という。そして、4 歳以前の子どもは、現実的な自分の状態（現実志向状態）と、〇〇との心理的融合状態とを、行き来しながら遊んでいるというのである。

4 歳を過ぎてから「ぼくは、ライオンではないが、ライオンを演じるのだ」という意識（これを加用は「対立させて意識する状態」と呼ぶ）がハッキリとするようになっていき、3つの状態を行き来しながら遊ぶようになるという、図1のように整理している。

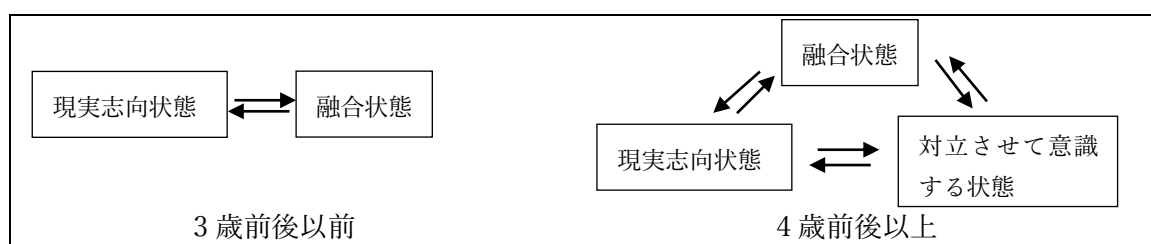


図1. 前期のごっこ遊びと後期のごっこ遊び (加用文男 p157 より)

さて、久保田と加用の議論をまとめてみたい。2人は、ごっこ遊びにおいて、子どもが「何者になっているのか」という状態を捉えるとき、「役割」という視点は重視しておらず、一人一人の子どもの心理状態がどのようなあり方をしているのかということに着目していた。加用は4歳以前では、子どもが何者かになるという状態にあるとき、「自分とその何者かが未分化に融合した状態にある」とし、4歳を過ぎてからは久保田が「〇〇らしく演じよう」とするようになるという指摘したように「対立させて意識する状態」が生まれ、

①現実志向状態、②融合状態、③対立させて意識する状態、と 3 つの状態を行き来しながら遊んでいるとして整理している。

久保田はさらに、遊びが進んでいくと組織化が進み、内容が豊かになると指摘している。つまり、いろいろな役割が生み出され、かかわりが複雑になっていくわけである。例として「電車ごっこ」が挙げられているので、辿っていきたい。まず、3 歳児の姿である。

三歳児の子どもたちが、「でんしゃごっこ」をしている。園庭にある遊動円木をつかってのあそびである。先頭にのっているのが運転手であり、あとはお客である。この役割りの分化は、きわめて単純なものであり、しかし運転手も、お客も、べつにかわった行動をするわけではない。しばらくすると交代する。これもきわめて機械的にこなされる。(pp212-214)

ここでは「役割」は単純なものであるが、次第に変化していく。

次いで、なわを使った電車ごっこが紹介されている。そこでは、誰がどの役につくのかという、お互いの話しあいや説得が必要になり、運転手や車掌、乗客がはっきりと分化し、あそびの中での役割が違ってきている様子が描かれている。

さらにあそびが発展すると、駅長、出札係、改札係、運転手、というように、役割は細分化し、専門化していく。

しかも、こうした細分化した役割りは、それぞれの持ち場をもちながら緊密なかかわりをもたなければならないと考えはじめる。出札係がいないと、改札係のしごとはできないわけであるし、ここでキップを切らなければ、電車に乗客をのせることはできない。いままでのように電車は自由にはしりだすことはできないし、もしそんな行動をするものがあれば、まわりから批判されなければならない。発車の合図をするのは駅長である。

そしてまた、駅長は、電車がこなければ、なにもできないことを知るようになるわけである。

こうしながら、子どもたちは、全体のあそびと役割りの分担との関係をはっきりとらえていくのである。(pp212-214)

筆者は先に、「役割」という言葉の辞書的な意味として、「役目をそれぞれの人に割り当てること。また、割り当てられた役目」とされており、「全体を捉えることとセット」であると論じた。久保田が示した上のエピソードには、その言葉の示す文字通りの姿が描かれているといえるであろう。ここではひとまず、役割は「登場人物としての役割」として捉えられているということを確認しておきたい。



#### 4. 八木紘一郎編著『ごっこ遊びの探求』から

では次いで、八木らの『ごっこ遊びの探求』（1992、新読書社）を見ていきたい。八木自身は研究者であるが、幼稚園現場で子どもたちを生活している保育者たちと研究会をもち、そこで実践に基づいて議論されてきたことを土台に、ごっこ遊びの理論化を試みている。

まず「ごっこ遊びのオモシロさとは何か？」という問いを立て、「ごっこ遊びを展開させていく要素」として、次の5つを挙げている。

- ①役＝～になるオモシロサ、
- ②物＝～をつくる・使うオモシロサ、
- ③行為＝～をするオモシロサ、
- ④空間＝～にするオモシロサ、
- ⑤人・かかわり・組織＝～とするオモシロサ、

そして、この5つの要素は遊びの展開の中で比重が力動的に変化するものとしている。

ではここでも、「子どもが何者かになる姿」をどう捉えているかという点と、「役割」をどう捉えているかという点について探っていきたい。

上記の通り、ごっこ遊びを展開させていく要素の1番目に「役＝～になるオモシロサ」を挙げている。「このオモシロサは、これがなければごっこ遊びは出発しないといえるほど、全てのごっこ遊びにおいて中心的な位置を占めるものです」（p68）というわけである。この点についての詳しい説明は以下のように示されている。

子どもが、現実の自分以外の人間や動物、または架空の存在を想像し、自らその役になり、演じていくことを楽しむ姿です。

この時、子どもは、対象とする役の特徴を模索しながら演じたり、また、演じながらその役の典型を見つけていきます。その特徴及び典型とは、役が持つ形態、動作、ことばなどであり、たいてい、子どもたちは、それらをそっくりそのままではなく、自らが描く理想や期待を反映したかたちで表現します。この過程は典型化の姿ともいえるものです。

そして、このオモシロサは、これがなければごっこ遊びは出発しないといえるほど、全てのごっこ遊びにおいて中心的な位置を占めるものです。（p68）

「役」という言葉が何を指し示しているか、という点に絞って考察していく。すると、先に「登場人物としての役割」と呼んだ捉え方をしていることが確認できる。

「なっている自分を意識できている」（p41）姿を前提とする、としているのでごっこ遊びの中で「～になる」とすると、それはすなわち「役を担うこと」なのだという主張なの

かもしれない。しかし、それでは対象とする範囲が幼児期後期に限定されることになり、狭すぎるといえる。幼稚園の中でも、実際はもっと多様な姿が見られており、それらが地続きでごっこ遊びや劇遊びの「演じる」にもつながっていくわけである。それらの姿を無視するのは実情に合わないといえるだろう。

ただ一方で、この説明の指し示す内容は、「役を担う」ことに限定されているわけではないと読み取ることができる。すると、ここでもやはり、「役」（役割）という言葉で表現することの違和感が立ち上がってくることになるのである。

## 5. C・ガーヴェイ.『「ごっこ」の構造』から

さて、ここまでごっこ遊び研究の文脈において、「子どもが何者かになる姿」は、「役割（あるいは役）」と呼ばれ、それは暗黙の裡に「登場人物としての役割」と捉えられていることが確認された。

では最後に、はじめに河邊が引用していたガーヴェイの、その原典を当たってみたい。これは英語で書かれたものが翻訳されているため、言葉を吟味する上で誤訳の問題が絡んでくるかもしれないが、そのことを念頭に置いて考えていきたい。

河邊は「C.ガーヴェイは、ごっこの構成要素として〈役割〉〈物〉〈動きのプラン〉〈状況〉の4つを挙げています」としていたが、その内容を示すガーヴェイの文章を引用して確認しよう。

ごっこ遊びをしている子どもたちは、つぎのカテゴリーの中からその素材を用いるということがわかります。すなわち、(1) 役割または正体、それはその場の参加者のみならず、空想上の他人にも割り当てられます。(2) 動作や話のすじ書きについてのプラン、それはしばしば広範囲な劇をかたち作るように統合されます。(3) 物および状況設定、それは必要に応じて変えられたり、作りあげられたりします。

(p148)

こうして見てみると、ガーヴェイは単に「役割」としているだけでなく、「役割または正体」としていることが分かる。「正体」という言葉の原語はおそらく「identity」で、つまり「自分は何者か」ということである。ガーヴェイは子どもが「自分以外の何者かになる姿」を安易に「役割」とするのではなく、慎重に記述しようとしていると考えられる。

また、何者かになって、そのふりをすることを「演技」と呼んでいる。そして次のように説明している。「演技における実際の行動は、世界についての子どもなりの理解を通して濾過されています」、「演技の大半は、こどもが、社会の性質とその一員としての自分について知るにつれて獲得したり体制化したりした知識を、表現しています」(p151)と。興味深い内容であるが、この点の検討は別の場で行うことにしたい。

では、ガーヴェイは「役割」についてはどう説明しているのだろうか。実は多くの言葉を費やして説明しているのであるが、「役割」という言葉で、「家族としての役割」「登場人物としての役割」「型にはまった役割り」「架空な役割」「機能的な役割」など、いろいろな内容を示しているので、整理して要点をつかむことは容易ではないが、大きくまとめると、ガーヴェイが示している役割は大きく 2 種類あるといえる。すなわち、「登場人物としての役割」と「機能的な役割」である。

ガーヴェイのいう「家族としての役割」とは、「母親、父親、姉、兄、赤ちゃん、祖父、祖母」など、文字通り家族の構成員を指す。「登場人物としての役割」はさらに、「型にはまった役割」と「架空な役割」に分類されているが、要はその対象となる源泉の出どころの違いによって分類しているのである。それは社会的な職業であったり、物語の登場人物であったりする。これらは、河邊や久保田の示した事例の解釈にあったように、大人の演劇活動における「登場人物としての役割」と同じように位置づけることができると考えられる。そこで、これらはまとめて「登場人物としての役割」と呼ぶことにしたい。

注目する必要があるのは、もう一つの「機能的な役割」である。これは、例えば「病院ごっこ」における「医者」「患者」という捉え方でなく、「治療する人」「治療を受ける人」といった、その「正体あるいは役割」がもつ「機能」に着目した捉え方であるといえる。

家族としての役割を含む「登場人物としての役割」は、「機能的な役割」と重なることもあり得る。ガーヴェイは次のように説明している。

もちろん、家族の役割は、機能的な役割とも一致することができます。母親はふつう、ごっこ遊びの中で食事を作る人であり、父親は、危険に際しての防衛者でありました。家族の役割は、登場人物の役割とは一致しませんが、それらから変換される（とってかわる）ことがありました。（p155）

ガーヴェイ自身は、「登場人物としての役割」と「機能的な役割」とを整理して示しているわけではなく、文脈の中で明確に使い分けられているというわけでもないため、この 2 種類の使い方をしているということは暗示的であるといえる。だからであろうか、他の研究者によってこの点は焦点化されてこなかった。しかし、この着眼点はごっこ遊びを理解する上でとても重要であると考えられる。というのも、例えば、「登場人物としての役割」として医師を取り上げてみると、ごっこ遊びとして「医師になる」際に重要な「医師らしさ」とは、医師というポジションにあらわれるのではなく、医師として行為する中にあらわれるわけである。医師らしい行為を象徴するのは治療行為であろう。これはガーヴェイのいう「機能的な役割」の側面である。

ごっこ遊び以前に、そもそも子どもが社会生活の中で様々な人々の担っている「役割」をどう理解していくのかということに目を向けてみよう。実際の社会における役割は単独

には存在していない。たとえば医者という役割は患者という役割が、妻に対して夫が、という具合に一对となって成立している。あるいは、野球における投手―捕手―打者のようにシステムとして存在している。子どもがこうしたことへの理解を進めていく過程においては、「機能的な役割」という側面への注目から、「登場人物としての役割」という側面を理解していくということが考えられるだろう。つまり、この 2 側面を明確に捉えておくことで、「何者かになっている」子どもの姿をより深く理解することへつながっていくと考えられるのである。

## 6. おわりに

本研究では、『子どもが自分以外の何者かになる』姿をどのように捉えるか」という問いについて探ることを目的として、幾つかの先行研究をレビューしてきた。その結果、子どもが「自分以外の何者かになる」姿は、「役割」という言葉で捉えられてきたことが確認できた。

しかし、幼児期のごっこ遊びにみられる子どもたちの「自分以外の何者かになる」姿は多様であり、「役割」という言葉で捉えるには違和感が生じる場合がある。ガーヴェイはそれを「正体または役割」といった言葉で表現していた。また、「役割」についても、「登場人物としての役割」だけでなく、「機能的な役割」という内容を示していた。

幼児期の子どもたちのごっこ遊びには、久保田の示した事例に見られるように、「全体の遊びと役割の分担との関係をはっきりとらえていく」姿もある。そうした場合の、子どもたちが「車掌」「駅員」「運転手」などの「自分以外の何者かになる」姿は、「役割」と呼ぶのがふさわしいといえる。しかし繰り返しになるが、実際の子どもの姿としては、恐竜になって吠えながら 1 人歩き回る姿など、「遊びの全体」ではなくある部分のみに関心を示して「何者かになる」姿も多く見られるのである。あるいは逆に、医者になっているつもりはなく治療行為のみを楽しんでいる姿なども見られる。こうした姿を捉える際には、ガーヴェイの示した「機能的な役割」という視点が有効であることが示唆された。

ただ本論では、ごっこ遊びにおける「登場人物としての役割」と「機能的な役割」とをどう整理すれば、子どもが「何者かになる」姿の理解を深めることに効果を発揮するのかという点には触れられていない。今後、実際の事例を分析しつつ整理していくことを課題としたい。

## 注

1) 高橋たまき (1993) は、より詳しく「ソロ (solo) のふり遊びでは、個人レベルのイマジネーション (想像力) が楽しめる。ソロのふり遊びが社会化された形態が、ごっこ遊びである。ごっこ遊びは、複数の子どもが参加して、各々が役割を分担し、役割にふさわしい「ふり」の行為を演じつつ、一定のテーマを織り成していく遊びである」と定義して

いる。

#### 参考・引用文献

河邊貴子（2020）『遊びが育つ保育～ごっこ遊びを通して考える』フレーベル館

高橋たまき（1993）『子どものふり遊びの世界』ブレーン出版 p 4

麻生武（2010）「遊びと学び」佐伯胖監修、渡部信一編『「学び」の認知科学辞典』、大修館書店、138

久保田浩（1973）『あそびの誕生』誠文堂新光社

加用文男（1983）「ごっこ遊び」河崎道夫編著『子どものあそびと発達』ひとなる書房 pp.137-171

八木紘一郎（1992）『ごっこ遊びの探究』新読書社

C・ガーヴェイ（1980）『「ごっこ」の構造』サイエンス社